

# 畑作技術情報

発行 令和7年4月11日  
第1号  
たいせつ農業協同組合  
営農部 農産販売課  
上川農業改良普及センター  
本所 営農センター 57-2357  
支所 営農センター 87-4111

## ～起生期の茎数が多い場合は、～ 幼穂形成期型追肥に切り替えましょう！～

幼形期型追肥とは、起生期追肥を行わず 1 回目の追肥を幼穂形成期から始める追肥の考え方です。これにより茎数過多を回避し、最終穂数を 600 本/m<sup>2</sup>程度にし、過繁茂による倒伏や細麦を防ぎ、止葉を立たせ、株元まで光がとどく受光体制をつくって生産性を向上させる栽培法です。

秋まき小麦は起生期茎数が多い状態で、過度な追肥をすると茎数が過多となり過繁茂となって、倒伏や細麦となりやすい傾向があります。

### 1. 「きたほなみ」

起生期の茎数を調べ、茎数が多い場合(1,000 本/m<sup>2</sup>以上)は、起生期追肥を省略した幼形期型追肥を行い茎数コントロールを行います。

起生期茎数が 1,000 本未満の場合は、起生期からの追肥を行い茎数を確保します。

表1 「きたほなみ」の起生期茎数と追肥窒素施用量(kg/10a)

| 時期(平年値)<br>起生期茎数          | 起生期<br>(4/4) | 幼形期<br>(5/2) | 止葉期<br>(5/22) | 出穂期<br>(5/31) |
|---------------------------|--------------|--------------|---------------|---------------|
| 1,000 本/m <sup>2</sup> 以上 | —            | 6            | 4             | 4 ※1          |
| 1,000 本/m <sup>2</sup> 未満 | 4            | 4~6          | 4             | —             |

備考 上記施肥量は基準量であり、ほ場条件(CEC※2、腐植、堆肥施用、硝酸態窒素量など)、生産力(収量)に応じ増減する。 ※2 陽イオン交換容量、土壌保肥力の指標  
※1 3回目の追肥は、倒伏のリスクがあるので茎数、葉色を見ながら加減を行う。(出穂期の茎数が多く、止葉直下葉が葉色(SPAD)50 以上では追肥を行わない。)

◎幼形期型追肥の施肥事例 窒素(kg/10a)  
(起生期 1,000 本以上、幼穂形成期 5月2日の場合)

1回目 4/26 6kg [幼形期少し前]      2回目 5/13 4kg      3回目 6/1 0~4kg

◎ 幼形期型追肥は、1 回目の追肥は幼形期の1 週間程度前とし、前回の追肥から2 週間程度間隔を開けて2 回目の追肥、3 回目の追肥を行う。茎数コントロールを行い株元まで光が十分当たるような光合成能力の高い受光体制を作り、最終穂数は 550~650 本/m<sup>2</sup>程度を目指す。

農作業事故には十分注意しましょう！

